

「徘徊」使いません

認知症のお年寄りを地域ぐるみで見守る取り組みとして、全国に広がっている

「徘徊SOSネットワーク模範訓練」。その旗振り役として知られる福岡県大牟田市が、名称から「徘徊」

の文字をなくすことを決めた。「徘徊」という言葉が、偏見や無理解につながる

の指摘を受けての判断。訓練は全国100以上の自治体で実施しており、影響を

与えそうだ。訓練は2004年、市の住民団体が始めた。不明者の年齢や服装などの情報を

警察や市がメールで住民に知らせ、地域を挙げて捜索する。こうした動きを受け、

大牟田市は05年、全国に先駆けて「認知症の人とも暮らすまちづくり」を宣言。07年からは訓練を市主

理由も歩く人にも認知症



腰をかがめ「徘徊役」の人に声を掛ける訓練参加者＝昨年9月21日、福岡県大牟田市

大牟田市 訓練の名称変更

催で毎年秋に行っている。

認知症介護研究・研修東京センターの永田久美子研究部長によると、「どこでもなく歩き回る」とを意味する「徘徊」は、1980年代から、精神的異常行動を示す医学用語として定着。今や、認知症の代名詞として広く使われており、大牟田市も「安心して徘徊できる町」とうたって訓練を続けてきた。

しかし、専門家や認知症の人を抱える家族からは「目的なく歩き回るわけではなく、帰宅や買い物など、その人なりに理由がある」といった声が寄せられるようになった。このため市は、関係者と名称変更を検討。「全国に定着しているだけにもったいない」

「『徘徊』の文字がないと緊張感が出ない」との声もあったが、「認知症の人の心に寄り添うことが大切」（市長寿社会推進課の木下博文主査）として変更を決めた。

新名称は「認知症SOSネットワーク模範訓練」とする方向で、8月上旬に住民代表者に説明し、正式に決める。市と取り組みを進めてきた市認知症ライフサポート研究会大谷のみ子代表(57)は「私たちが使ってきた言葉をあえて変えることで、社会に一石を投じ、認知症の真の理解を広げたい」。永田部長も「行動への正しい理解や適切な支援を阻んでおり、言葉を変える勇気が必要」と話す。

（御厨尚陽）

偏見を生みやすい言葉

国際医療福祉大大学院の大熊由紀子教授（医療福祉国際比較論）の話 徘徊は「異常な人」など偏見を生みやすい言葉。国内で使用を自粛する動きはまだ浸透していないが、多くの自治体が手本にした大牟田が変われば、全国にも大きな影響を与えるはずだ。